

鳥取県地方方言の「イキテ」(行つて)について

室 山 敏 昭

はじめに

出雲と隠岐とに、「行つた」を「イキタ」、「行つて」を「イキテ」といふ珍しい言いかたがあることは、すでに、先学によって、指摘されている。共通語において、「行つた」「行つて」「走つた」「走つて」「切つた」「切つて」「買つた」「買つて」などとなる、いわゆる促音便の現象が、「行つた」「行つて」の場合に限つて、出雲と隠岐とで、「イキタ」「イキテ」となつて、促音化しない現象は、たしかに、興味ぶかい。が、この言いかたが、鳥取

県地方(西伯耆・東伯耆・因幡)においてどうであるかは、あまり述べられていないかと思ふ。この言いかたは、実は、出雲と隠岐とに限らず、鳥取県西伯耆地方においても、盛んに、おこなわれているのである。そこで、共通語においては「行つて」と実現する言いかたを、「イキテ」と実現するこの種の言いかたが、鳥取県地方において、どのようにおこなわれているかを、以下、見てみようと思ふ。

百伯耆地方（百伯郡・米子市・境港市・日野郡溝口町以北の範圍）においては、

○ヨナゴニ イキテ ミマシタダドモ ナー。（老男↓私）米子に行つてみましたけれどねえ。△米子市夜見新田▽

○トリー トコニ イキテ ミマシタ ナー。（老女↓私）遠い土地に行つてみましたねえ。△西伯郡名和町名和▽

○フサシブリニ イキテ ミマス クイ。（老女↓私）久しぶりに行つてみますよ。△名和▽

○マー アスコニ イキテ シタガ ナー（中男↓私）まあ、あそこに行つてみたがねえ。△西伯郡大山町所子▽

○ソノ トージ イキテ ミマシタ ナー。（青男↓私）その當時行つてみましてねえ。△西伯郡中山町逢坂▽

○キノー イキテ シタ ダカ。（小男↓小男）昨日行つてみたのか。△西伯郡西伯町中村▽

のように、「イキテ ミル」の言いかたが、なかならず盛んである。この言いかたは、西伯耆地方に、広くおこなわれており、年齢層・性別によるかたよりは、ほとんど、認められない。

因幡地方（八頭郡・鳥取市・岩美郡・気高郡の範圍）に含まれる八頭郡の若桜町においても、この「イキテ ミル」の言いかたが、相当に盛んである。

○マー アスコイ イキテ ミー ユーケー。（老男↓私）まああそへ行つてみると言うから。△八頭郡若桜町若桜▽

○アクルビニ イキテ シタイ イヨラレマシタガ ナー。（老男↓私）翌日行つてみたいと言つておられましたかねえ。△若桜▽

○キクニンギョー ニ イキテ ミマシタガ ヨー。（老男↓私）菊人形を見に行つてみましたかねえ。△若桜町諸鹿▽

○ウラゲノ ブンケニ イキテ ミマシタトコガ ヨー。（老男↓私）私の家の分家に行つてみましたところがねえ。△諸鹿▽

因幡地方の「イキテ ミル」のおこなわれさまを、西伯耆地方のそれと比較してみる。因幡地方においては、現在までに、筆者が調査し得た範圍について言えば、若桜町という、かなり限られた地域に、この「イキテ ミル」の言いかたが、おこなわれているようである。そして、若桜町においては、中年層以下は、この言いかたをほとんどおこなつておらず、もっぱら、「イッテ ミル」の言いかたをおこなっている。この二点で、差異的となつていふと言ふことができよう。若桜町における「イキテ ミル」の用法は、西伯耆地方の「イキテ ミル」のそれと、同様である。

二

「イキテ ミル」の言いかたについて、「イキテ クル」の言いかたがとりあげられる。

○アスコイ イキテ キテ ゴシエー。（老女↓青女△孫▽）あそこへ行つてきてちょうだい。△西伯郡名和町御来屋▽

○イキテ キマス クー。（老男↓私）行つてきますよ。△逢坂▽

この言いかたも、西伯耆地方に、よくおこなわれている。ここで、「イキテ ミル」「イキテ クル」の意義について考えてみる。両者は、「行く」の意義に、かなり近いものとなっている。といふのは、「イキテ ミル」において、補助詞的機能をはたして

る「ミル」には、「見る」の意義はほとんど認められず、又、「イキテ・クル」において、補助詞的機能をはたしている「クル」には、「来る」の意義が、かなり稀薄になっているからである。

「イキテ・クル」の言いかたは、東伯耆地方（東伯郡・倉吉市の範圍）の東郷松崎町田畑においても、次のように、おこなわれている。

○イキテ キタ カ。（老女↓老女）行ってきたか。△田畑▽

○イキテ キタ ダー。（老女↓老女）行ってきたよ。△田畑▽

東伯耆地方において、「イキテ」の言いかたが認められるのは、現在までに、筆者が調査し得た範圍について言えば、この田畑だけである。周囲の部落の人々が、「あの部落は、いわば孤立状態にある。ことばも変っている。」と説明してくれる土地柄の一部落に、「イキテ」の言いかたが認められることは、興味ぶかい。田畑におこなわれている「イキテ」の言いかたは、老年層にしか認められず、中年層以下は、「イッテ」の言いかたを、おこなっている。その点で、若桜町の「イキテ」の存立状況と相通ず。

三

次いで、「イキテ・ゴス」の言いかたがとりあげられる。

○ダイタイナラ マー ツレテ イキテ ゴサレマスケン ナー。

（老女↓私）大体ならまあ連れて行って下さいますからねえ。△名和▽

この言いかたも、西伯耆地方には、だんだんと認められる。

四

「イキテ・ミル」「イキテ・クル」「イキテ・ゴス」のように、それ全体で一話部を形成する「イキテ」の用法とは別に、「イキテ」の「テ」に、接続助詞としての中止的機能が認められる言いかたも、かなりおこなわれている。

○イキテ ヤドシテ、モラッテ ナー。（老女↓私）行って泊めてもらってねえ。△名和▽

○ウチヲチガ イキテ ハナスト ナー。（青女↓青女）私達が行って話すねえ。△赤坂▽

○オドシモ イキテ オドリョウッタ。（老女↓老女）私も行って踊っていた。△田畑▽

五

次例のように、「イキテ」の言いかたを、係助詞の「モ」が、うけることもある。

○イマイゴロ ドッコニ イキテモ ミシエヤガ アーマスケド

ナー。（中男↓私）今頃はどこに行っても店がありませんけどねえ。△所子▽

六

又、次下の用例に見られるように、「イキテ」の言いかたに、文末詞「ナー」「ヤー」が、承接する用法も認められる。この用法は、西伯耆地方に、とりわけ盛んである。

○ミンナ カツイデ イキテ ナー。（青男↓中男）皆がついて行ってねえ。△夜見▽

○ハヤー モノワ シグ ヤマニ クサカリニ イキテ ナー。

(老男↓中男)早起する者は起きるとすぐに山に草刈りに行ってねえ。△所子V

○ハダツグライノ トキニ イキテ ナー。(老男↓私)廿歳く

らいの時に行ってねえ。△赤坂V

○イッショニ ツレテ イキテ ナー。(老男↓老男)一語に連れて行ってねえ。△田畑V

○キミサン。ドコ イキテ ヤー。(中女↓中女)きみさん。(人名)どこに行ったの。△御来屋V

以上、一から六までに見られるように、鳥取県地方における「イキテ」の言いかたは、西伯耆地方で、なかならず盛んにおこなわれている。その用法も、かなり幅広い。そこには、共通語の「行って」に認められる用法の種々相が、見合わされるようでもある。東伯耆地方の田畑ならびに因幡地方の若桜町において認められる「イキテ」の用法も、西伯耆地方の用法に準ずる。

おわりに

鳥取県地方方言における「イキテ」の言いかたを大観すると、西

伯耆地方においては、それらの言いかたが、なかならず盛んであることが、まず、注目されよう。この地方は、まさに、「イキテ」による生活を営んでいるのである。一方、東伯耆地方においては、田畑という一部落にかぎって、それらの言いかたが認められ、因幡地方においても、若桜町というかなり限られた範囲に、その言いかたが認められるにすぎない。

東伯耆地方においては、すでに、「イキテ」の言いかたが、変わった言いかたであるという印象を、与えるまでになっている。したがって、この地方の人々は、田畑に認められる「イキテ」の言いかたを、耳だたしいことばとして指摘する。

因幡地方の若桜町において認められるそれらの言いかたも、田畑同様、いわば、孤立状態とも言うべき姿を呈して、存立しているかのようにである。

田畑ならびに若桜町における「イキテ」の言いかたは、その存立状況から判断するに、比較的近い将来には、認められなくなるのではないかと思われる。

(一九六一・十・十八 広島大学大学院学生)